

第一次大戦後における一年現役兵教育

一ノ瀬俊也

Post-WWI Military Education During a Year of Active Duty

はじめに

- ① 軍隊教育における日記の機能
- ② 国際情勢・未来の総力戦への即応
- ③ 一年現役兵の使命とは何か
- ④ 「植民地」朝鮮の教育としての意識
- ⑤ 軍隊経験の意義深さ
- ⑥ 一般社会における「背広の軍人」
おわりに

【論文要旨】

本論は、京城師範学校卒業生四五名が一九二四年四月、朝鮮龍山歩兵第七九連隊に一年現役兵として入営した際、各人が教育の一環として日々書かされた日記より主要な部分を抜き出して一年三六五日分の「軍隊日記」に編集、除隊後の二五年公刊した『凝視の一年』の内容分析である。第一次大戦後、まさに反戦反軍思想が最も昂揚した時期の兵営内で、未来の小学校教師として「国民教育ト軍隊教育トノ連携」者たることを期待された兵士たちは、軍隊の存在意義についていかなる説明を受け、どのように理解していったのだろうか。

分析の結果、一年現役兵たちは単に「忠君愛国」といった抽象的な題目だけでなく、国際連盟の無力、アメリカの脅威という具体的な国際情勢との関連から軍隊の存在意義を教えられ、かつ日常生活においてもそれを兵営外部、一般社会に対して語っていたことが確認できた。彼らは軍隊生活を「国民学校」と称するに足る、以後の人生に

とって意義深い体験として認識していた。彼らの語りの内容は、当該期の軍が自己の存在意義をどこに求め、国民に正当化しようとしていたかを示している。強制された「日記」は、教育の内容を日々咀嚼し、自らの言葉として発話させるための装置に他ならなかった。

もちろん、そのような軍の論理が一年現役兵たちにおいて完全に内面化されていたと即断するつもりはないが、『凝視の一年』の刊行自体、彼らが教えられた軍の論理を主体的に一般社会に向けて伝達しようとする行動であった。そうした彼らの思考の枠組みと実践は、通常反軍平和思想の高揚というイメージをもって語られることの多い大正期と、後年の戦時動員体制期との「連続性」という問題を考えると、きわめて示唆的な事実であると考える。

はじめに

本稿は、京城師範学校卒業生四五名が一九二四年四月、朝鮮龍山歩兵第七九連隊に一年現役兵として入営した際、各人が軍隊教育の一環として日々書かされた日記より主要な部分を抜き出して一年三六五日分の「軍隊日記」に編集、除隊後の二五年公刊した『凝視の一年』^①の内容を分析し、兵士にして教師という彼らの意識、ひいては当該期における軍隊教育の特質の一端を説明することを目的とする。

一年現役兵とは、「国民教育ト軍隊教育トノ連携」^②をはかるため、師範学校卒業生・在校者の現役服役期間を特に一年（一般徴兵は歩兵実質二年、他兵科三年）とし、退営時軍曹にまで昇進させた優遇策的制度である。同じ一年現役兵として一九二六年四月、歩兵第三四連隊（静岡）に入営した戸塚廉は、在営中私的に書いていた日記より、「軍隊教育が、どんなに私を変化させたか、私は明瞭に指示することはよくしない。しかし、この生活がかなり無形のものを与えたことは争われない事実だ。このことに軍隊を悪くいうものは自己をいつわるものだ。軍隊というものに対する先入主を改めることだ」との一節を引用し、「軍隊はここに、完全な支持者を作り出している」と回想している^③。

逸見勝亮氏は戸塚のこの回想から、「さしたるつらさを味わうことなしに軍隊を垣間見ることが（師範学校卒業生を）「背広の軍人」に仕立て上げるうえで有効であったことは想像に難くない」と指摘する^④。氏がこのように述べたのは、「教育勅諭中ノ人」であるとともに「軍人勅諭中ノ人」である師範学校卒業生が、「侵略戦争と教化運動に終始した一九三〇年代以降」の国民教化政策中に果たした役割の大きさを強調せんとしたからである。とすれば、未来の国民教育の担い手たる彼ら師範学校卒業生が、大正末期の軍隊教育の中で具体的にいかんにして軍隊の「完全な支持者」

となっていたのかを問うことは、第一次大戦後における軍隊教育の特質のみならず、後年の戦時動員体制を支えた社会的基盤丸山真男^⑤とこの「亜インテリ」の形成過程を考える上でも、きわめて興味深い問題といえよう。

この時期書かれた軍隊日記といわれてすぐに思い浮かぶのは、反戦作家の黒島伝治が一九一九〜二二年まで、一兵卒として上官の目を盗み私的に日々書き綴った日記『軍隊日記』（理論社、一九五五年）である。その内容を一言で言えば軍隊生活への呪詛である。「解説」を執筆した壺井繁治はこうした「軍隊生活の重圧にたいする一つの抵抗を動機とする軍隊日記」（二八七頁）が書かれた背景として、「労働者階級の運動の波の高まりにささえられ、幸徳事件以来封鎖的であった日本社会に自覚的な社会主義運動が展開されていった」ことを自己の経験もふまえ指摘している。

一方、同時期の軍隊教育においては、兵士たちに日記を強制的に書かせるという行為も観察されるのである。例えば一九二五年歩兵第一八連隊に入営した兵士たちの軍隊生活回想集には、「当時日誌を記して居ったから、その中から（記事を）抜粋した。但し初年兵時のは班長に提出を求められる事があるので、用心深く記されて居て無味乾燥だ」といった記述がある^⑥。やや後の満州事変期にも、一年現役兵制度の直接の後身である短期現役兵として一九三一年四〜八月まで歩兵第四二連隊（山口）に服役した小学教員藤野幸平（山口県師範学校卒）は、毎日日記を付け、班長に提出させられていたと回想している。「短現に対するするどい眼は特に日誌に注がれ」たため、藤野は「わが皇軍の真髄を少しでも身につけて、鴻恩の万分の一にむくいるべく、退営後は教職に挺身する覚悟である。五カ月という短い期間ではあるが」といった調子のいい作文で（文字通りの作り文）毎日の反省をうめて行った^⑦。しかし同年兵二名は「日誌の文句が不穏当であったということ、一日間の（軽）営倉という処罰を受けた」という。

これらの回想からわかるように、兵士に軍隊生活の「所感」や「日記」を書かせることは彼らの思想を監視して逸脱者を発見、懲罰する方策に他ならなかった。「日記」の強制と上官による点検という兵士監視策は、第一次戦後の社会状況に対する軍の危機意識によるものと考えられる。^⑧従来の研究は、この時期の軍隊の動向を左翼反軍運動への対抗の過程として描いてきた。^⑨そしてその時、黒島の『軍隊日記』は当該期の「兵士の間における思想的動揺」、「懐疑と批判」^⑩の具体例として掲げられてきた。

だが、冒頭に引用した戸塚の回想を読めば、上記の黒島日記をもって当該期の兵士意識の特質を説明しつくしたことになるのか、藤野の記述から強制された軍隊日記は全て「文字通りの作り文」であると片づけてよいのか、軍隊の「支持者」を造り出す要素は皆無だったのか、という疑問を提起することは許されよう。戸塚は「教師のタマゴ」を收容するためには、軍隊をきらいにならない程度に、注意深く、その扱いが研究されたものである（戸塚前掲書六三頁）と軍隊生活を回想するが、だとすれば当時の軍はどのように彼ら「教師のタマゴ」を「軍隊をきらいにならない程度に」扱っていたのだろうか。

本稿の分析対象である『凝視の一年』は、約七五〇頁と大部にわたる書籍であるが、その内容を一言でいえば、軍隊賛美論である。「日記」とは、なぜ軍隊が「賛美」に値するのかを彼らに繰り返し思考させる装置に他ならなかった。それを上官に対する阿諛の産物、特権的身分ゆえのもので、軍隊の過酷な実態を反映したものでないと片づけるのは簡単なことである。だがそれで話を終えたのでは、なぜ彼らが退官して軍隊の監視下を離れた後、わざわざそのような軍隊賛美論を公刊したのかという問題を解くことはできないだろう。われわれはそこに、なにがしかの軍隊に対する支持、共感を見て取らないわけにはいかないのである。

同書に書かれた軍隊「賛美」論の内実、一年現役兵たちがそれを身に

つけていく過程を他連隊の事例や当時軍隊教育にあたった陸軍将校の記述・発言と併せ、「植民地」の小学教員という特質にも留意しつつ検証することは、彼らがいかなる文脈により軍隊は「賛美」に値すると理解していたのかを探る手がかりとなる。彼らの未来の小学校教師という立場を考えれば、彼らの軍隊賛美論の内実を探ることは、第一次大戦後という最も反軍平和思想が昂揚した時期の軍が、どのような論理のもとに自らの存在を兵士たち、そして社会に向かって正当化しようとしていたのかという問題にも深くかかわると考える。

① 軍隊教育における日記の機能

『凝視の一年』に収録された一年現役兵たちの日記の内容は常に教官により点検されて、適当でない判断されれば指導が加えられた。ある一年現役兵は「軍隊にゐると石頭箆頭になつて了ふ。この石頭箆頭に教へられる子供こそ実にあわれなものだ」と書いたばかりに教官に呼び出され、京城神社に参拝して「神前で一年現役兵教育の目的をよんで」との指導を与えられた。彼は参拝の途中「入営して今日に至る迄の道程を考へ、今更乍ら自分の誤つてゐたことをどんなに悔いた事だらう」（二月一日、熊谷鉄之）と反省した旨日記に記している。

日記はそうした日々の思想調査だけでなく、「国民教育」者たる一年現役兵たちに、

今日も亦日誌充実の話、それについて昨日教官殿から読んで聴かされた平野国臣についての感想を書いた日誌二三を読まされた。その一方は、非常に善い方で、一方は、拙い方である。同じ未来の教員様で、生徒と先生との差がある。（二月一日、井下田繁雄）

などと、種々のイデオロギーに関する教育内容を逐次回想・筆記させるとともに、「頭の善し悪し」を本人たちの面前であからさまに比較して

確実に記憶するよう努力させるといふ機能も有していた。ただし『凝視の一年』の公刊自体は、一年現役兵たちが教官との会話の中で「かねて我々が計画してゐた日誌刊行の事に付いて色々御意見を話された」、「充実した上品なものを作って以て自分等の在營を永く記念すべく又より以上我等の生活を向上せしむべく務めねばならぬ。「凝視の一年」此の本にして此の名を付く可きふさわしい名であると思つた」(五月三十一日、桑畑文雄)と記しているように自発的なものであった。彼らの側でも「日記」を軍隊体験で得た経験を記録し「生活を向上」させる糧と位置づけていたし、「心が淋しいから日誌も淋しい」(八月二四日、上野寛)とある一年現役兵が記しているように、いわば「心を映す鏡」としても意識されていたのである。したがって、彼らが「日記」を単に強制された空虚な日課として、何の意義も認めていなかったとは一概に言えないだろう。

② 国際情勢・未来の総力戦への即応

一年現役兵たちは教育の中で、当該期における国際情勢との関連上、軍隊の存在は必要であるとの説明を繰り返し受けていた。より具体的に言えば、国際連盟は所詮無力であり、それゆえ戦争は再び遠からずやって来るといふ論理である。

国際連盟は成り相当の有識者間にも「世界に永久の平和は実現された」「斯くなれる以上は軍隊等は無用の長物だ。」と言はれた併し連盟を施行する上の絶対の監督者はないのだ、よし国際連盟なるものは絶対の権力者であつて国と国との戦争を防止し得たとしても、「中略」現在の世界に於ては人類の心根を改善せぬ限り、永久の平和は決して実現されるものではない。(三月三日、上野寛)

あるいは、

現連盟の組織を以てして其の制裁を連盟国相互の武力協同に託し之に威力を期待するが如きは水に映ずる月影を捕へ得るものと信ずるに等しく其愚や誠に憫むに堪へたり。彼の軍縮会議を見よ米國は日英同盟を止めさせて太平洋を安全にし支那の豊原に手を延ばさんとしてあるのである。かくして口には盛に軍縮を唱へて国際連盟の発起人たる米國は大統領が變ると同時に国際連盟から分離してゐるではないか。(三月二二日、塩井武芳)

「永久平和論」すら唱えられ軍縮論・反軍思想の著しかった当時において、一年現役兵たちは国際連盟の無力さを予見、強調し、「平和の実現は不可能ならば國家の安泰のために是非國家の保護をなす兵を養はねばならない」(前掲上野)と主張する。そのとき具体的な仮想敵として挙げられたのが、塩井現役兵の記述に出てきたアメリカである。なぜ日本はアメリカに対抗して行かねばならないのか。

まず第一の理由として「近頃の新聞は言う迄もなく米國の移民法案で持切つて居る。これに伴つて対米感情は日に日に激昂して来る」、「この米國の狂暴に対抗して行くにはどうすればよいか。黄色人種の提携だ。滿鮮一体となり其処に力強い根を張つて狡猾なる白人の仕打に対抗して行かねばならない」(六月九日、真栄城朝康)と、アメリカでの排日が挙げられる。真栄城現役兵はそれを「第六中隊の中隊長室で教官殿から今朝の新聞を読んで聴かされた」と記しており、軍がこうした文脈で日々反米意識を喚起していたことが分かる。

第二の理由として、「口には正義人道をとなへつゝ率先して、国際連盟の締結をしながら自分は其の盟に加入せず盛にタンクを作つてゐる軍隊をふやしてゐる毒瓦斯連隊まで設置し将来戦に於て大いに之を使用すると公言して平時は肥料に使用する頭がい」と云ふか、ずるいといふか、実際思ふだけでぞつとせざるを得ないのである」(三月三十一日、吉尾勲)とアメリカの積極的な軍拡が指摘されている。

当時盛んに唱えられた「国家総動員」論も、「軍隊は国防の第一線に立つものにして軍隊のみが国防に当たるものでは決してない。国防は拳国一致であらねばならぬ。故に青少年訓練は国民に基礎的精神訓練を施し一朝有事に際し狼狽せず任に当る事の出来得しめんがためなり。国防は国民全体の負担である故に少年の時より此の精神を養ふ必要あり。かゝる状態に在れば我等教育の任に当るものは勤勉奮闘し国家社会の爲め献身的努力をせざるべからず」(三月二日、塩井)と説明されている。彼らは「青少年訓練」の担い手という自己の任務の必然性を、「国家総動員」体制構築という国家的課題との関連のもとに説明されていたのである。

このように「忠君愛国」などといった単純・抽象的な題目ばかりでなく、第一次大戦後の国際情勢、さらにその中で仮想敵・アメリカを具体的に示してみせたことが、一年現役兵たちに軍隊・国防の必然性、自己の使命を論理的に理解させたと言えよう。「日記」の強制は、兵士としての自己と国家の関係を、論理的・主体的に日々思考させていく訓練に他ならなかった。

この時期他の連隊でも、同様の論理のもと軍隊の存在意義を語ろうとしていたことを示す史料として、野砲兵第一七連隊(千葉県国府台)第六中隊が作成した「大正十一年度各年兵精神訓話予定表」^①がある。同表より第一次大戦・国家総動員関係の講話予定を抜き出してみると、「(イ)国家総動員ノ意義(精神的動員 人員的動員 物質的動員)(ロ)平時ノ準備(ハ)国家主義ニ就テ」(四月)、「(イ)世界大戦ノ追憶(同盟軍四国ニ対シ對抗ノ地位ニ立チシモノ二十八箇國激戦四年四箇月、参加兵力六千八百万、損耗兵力千百万、財ヲ費スコト三千有億円)(ロ)新鋭兵器ノ發明ト交戦法ノ一変(ハ)持久耐戦率ノ優劣(ニ)尽忠報國ノ至誠(ホ)攻撃精神ノ涵養」(五月)、「(一)國ニ実力ナケレハ条約等ハ頼ムニ足ラス」(六月)、「(イ)國際連盟、太平洋會議ノ由来(ロ)歴史ハ繰リ返ス(ハ)宇内ノ大勢ト極東ニ於ケル帝國ノ地位(ニ)国防ト軍備(ホ)世界

永久平和説ニ誤ラルル勿レ」(九月)などの文言が並んでいる。同表はあくまで予定であり、この通り実施されたとは断言できないが、第一次大戦後の軍が同時代の社会状況を踏まえ、平和論批判、「総力戦」への対応という論理のもと、自己の存在意義を兵士たちに繰り返し語ろうとした姿勢を読みとることができる。このように自己の存在理由を論理的に語ろうとした軍の態度は、前出戸塚廉短期現役兵の「國務遂行のために軍隊は必要なのだ。何も戦争の用のみに止まらないのだ」という教官の大尉の発言に、「こうした理解を本意とした教育法でありたい」と「感服」した旨の回想からもみとることができる。^②

また、やや後のことであるが、短期現役兵として一九三〇年四月高田歩兵第三〇連隊に入営した寒川道夫は、自称「反軍閥争の短期現役兵」として、満蒙問題に関し土肥原(賢二)連隊長に直接意見申したいと申し出た。すると「破天荒なこと」に受け入れられたので「満蒙問題」解決のために日本が武力を使うことは「皇化に浴させる」ということと矛盾するのではないかと主張した。すると土肥原は「皇軍は武力を使って満蒙を植民地にするのではない」とハッキリいい、「とにかく三〇分ほどでしたが、若造の熱弁をじっと聞いてくれた」という。^③こうした土肥原の対応は、寒川の短期現役兵という身分故のことだったのは想像に難くないが、暴力ではなくある一定の論理を用いて彼らの支持・合意を形成しようとする軍の姿勢をみとることができる。

ではこのような軍の論理的説明を受けた一年現役兵たちは、未来の教育者にして兵士という自己の立場・使命について、日々いかに思考し実践していったのか、この点をもう少し詳しく観察していきたい。

③ 一年現役兵の使命とは何か

ある一年現役兵は、教育者としての自己の使命について、日記中次の

ように述べている。

軍隊と社会の接触を計るものは教育家でなくて誰があらう、人心は漸く浮華放縱に流れ護国の念は軽薄となり国家の要路に立てる人を別人の如く軽視し国難襲ひ来たつて初めてその力を軍隊に求め、救援をさげび一旦世の中が静まつて事がなくなればやれ軍備が不必要だ何だのと軍人を邪魔物使ひする様ななげかわしい、現代の風潮となつて来た。国防のない国は滅びる。(中略)根拠のない軍備縮小を説き廻つた代議士の大馬鹿もゐることを我等は忘れてはならぬ。腐敗せる現代人を我が国民性に立ち帰らせるのは教育家ではないだらうか。(四月二十八日、柴田精一)

同時代の「反軍」的な社会状況に危機感を持ち、「軍隊と社会の接触を計る」すなわち軍隊の存在意義を社会に向けて説くことこそ我が使命と力説する。史料中の「馬鹿代議士」とは、おそらく尾崎行雄あたりを指すのであらう。その尾崎の軍縮論に関して、別の一年現役兵は、休日に友人の家へ行き、その父親と交わした問答を日記に記録する。

「お前達はどうか、俺は尾崎さんの説の様にもつと師団を減じて産業の発達を促した方がよい、その代り学校で一通りの訓練をやれば充分だと思ふ(中略)我等も負けぬ気になつて一つ一つ反対して行く」「学校の訓練なんかで戦争の役に立つ様だつたら文句無しですよ、精神の鍛へられてない兵隊は駄目です、砲煙彈雨の中を物ともせず戦う兵隊は学校の畑では出来る筈がありません」(二月一日、古賀勇)

他愛ない議論のようだが、一年現役兵たちが当時の一般社会における反戦軍縮思想の是正善導、「軍隊と社会の接触」という使命感から、その軍事観・知識を社会に向け積極的に語つたひとつの事例と読めないだろうか。引用文中の「学校の訓練」、すなわち同時期に反対運動が盛んに展開された学校教練の問題についても、別の一年現役兵は日記に各大学、専門学校での軍事教練反対運動は「現代青年のあまりに考の浅いのにな

さげなく感ぜらるる」、「近来学校や社会に於て科学研究の下に、盛に社会主義が論議される事は是非ないこととしてこれが為に彼等が次第く其の主義的色彩を帯びてくるのは嘆げかましい」と批判し、「教育！それは国家あつての教育なので、君国を忘れて我國の教育をどうしようとするのか、帝国の危機とは只口先にならべ立てる語ではないぞ、愛する国家の為、吾らほもつとく切実に考へる必要がある(中略)よく目をみ開いて我帝国の現状と、世界の大勢とをみよ、戦後に於ける、各国の国家主義によつての堅実な歩みを知らざるか」(一月六日、石井貞勝)と自己の使命を語っているのである。

上記の記述以外にも、彼ら一年現役兵が「教育家」としての自己意識に基づき、軍隊で習得した軍隊の存在理由を、一般社会に向け語りかけた事例は観察される。三月二日、一年現役兵たちは「京城師範学校々校友総会」に出席した。当日の様子を日記に書いた吉野好雄は、一年現役兵代表者中尾勲が「会員談話」において、

世界永久の平和の理想は絶対に有り得ない筈。世界の平和は武装的平和であることを忘れてはならぬ。而して完全な教育は完全な国防があつて後完成される。平和の理想策であるべき国際連盟を提唱した米因、その米因にして、之に加入せないと云ふ滑稽を呈してゐる様は何だ。一方に軍備制限を高唱し乍ら、無制限の空軍の大拡張を行ひ毒がす連隊までを設けてゐる。今度の太平洋を股にかけて行ふ海軍大演習の想定たるや、「米因は某因(?)との国交断絶して布哇及米因西海岸は敵襲を被らんとす」と、如何に傍若無人な彼因が敢行するものとしても、又如何に日本人が西洋崇拜者であるとしても、忍従な国民であるとしても、私共は何とか之に手筈がなくてはなるまい。

と、「傍若無人」アメリカへの対抗上国防力の整備拡充は必要で、そのため尽力することが自身の使命であるとの論理を展開し、「若き巢立ち

の教育者諸君に一大雄弁を振り、大警告を与へ深く銘感させた」旨述べている。前掲『凝視の一年』中の米國批判に関する記述と全く同一の論理である。またこの時藤田一義現役兵も「関東大震災時に」同胞を逆殺しておいた大和の人が、毛色の違ふ米國人が一隻の救恤船を寄越したことを神様の様に伏拝して狂喜した。そして日米親善は成れりと寝言を言っていた。豈計らんや、米國の救恤船は軍事の計画の下に太平洋の波を横切つて来たに過ないのであつた」と、反米論を演説している。

このように一年現役兵の側も、「未来の國民教育者」としての自己意識に基づき、軍隊教育の中で身につけた軍隊擁護の論理、すなわちアメリカの脅威と対抗策としての総力戦体制構築の必要性を、在営中から一般社会に向け語っていたのである。このことは、「國民教育ト軍隊教育トノ連携」者という退營後の彼らの立場を考える時、重要な事実であろう。

④「植民地」朝鮮の教育者としての意識

『凝視の一年』の一年現役兵たちは京城師範学校の卒業生であり、後世の視点からみれば「植民地支配の尖兵」といえなくもない。一年現役兵たちは退營後の自身が「植民地」朝鮮で國民教育を行うことについていかなる意識を有していたのか、彼らの所感を数点挙げてみよう。まず、朝鮮民族の「服従」調達こそ我が使命と述べる者がある。

我国防方針が五五三の關係となつた故自然にこれを変へねばならなくなつた。即攻撃を主としてゐたのを防御を主とせねばならない。斯うなると國民の量はどこから来るか。勿論満鮮である。然らばだ、満鮮民を如何に遇すべきか。彼等をして好く感ぜしむるは國民の努力の如何にありと謂ふも我々教育者の責任少しとせず、といふわけになる。日満鮮の融合。吾々の使命は、之だ。権利は日本に属し土地は日本の有となり日本の威光四海を照すと云ふも只一つ彼等

の心を己が有とせずんば何の用に立とうか。其がために、吾々は日常の覚悟が肝要になつてくる。(六月八日、上野寛)

このように「日満鮮の融合」「仁に依りて彼等の心を捕へ彼等をしてだ、我國民の爲には如何なる犠牲も喜んで払ふと心に誓はする」ことが肝要という「模範解答」を述べる現役兵がいる一方、意識的であるか否かは別として、朝鮮人に対するなにかの差別感・距離感を「日記」に表明している現役兵がいることは興味深い。ある現役兵は外出の際、教生時代の朝鮮人の教え子に声をかけられ、彼が自分を覚えていたこと自体には感動しつつも「朝鮮人でも内地人でも決して教へ子に対する愛に於て変つた事はないのである。いくら汚い朝鮮人でも其愛たるや神聖なものである。(中略)自分は有り難い教官殿を戴いて居りながら自分は、只一つとして教官殿を喜ばせた事はない。つまらぬ朝鮮人の子供でも非常に可愛らしい所があるのに。今後の努力を誓ふ」(六月一日、田淵重雄)と言う。建前として「日満鮮の融合」を謳うことはあつても、「汚い」「つまらぬ」と差別感を隠そうとしない態度は、おそらく当時の朝鮮在任の日本人一般の態度であり、彼にとつても自然なことだったのだろう。かかる記述が上官に提出する「日記」に記されていることは、そうした差別意識が軍隊教育の「建前」レベルにおいてすら、さほど問題とされていなかったことをうかがわせる。

「全州第一公立普通学校」への赴任が決まっていた別の現役兵は、同僚となる朝鮮人教師との關係について、「自分の上席には内地の先生四人と鮮人教師一人、朝鮮の先生が大部分である。学校教育に経験の浅い自分が赴任してこの人達にもまれもまれるかと思ふと心配だ。鮮人教師は自分等をどんなに思つて居るだらうか嘗て教生時代陳瑞林訓導から鮮人教師には十分注意される様にとつて下すつたことを思いだした」(九月一四日、鈴木金次)と、本来融和すべき朝鮮人教師に警戒感、不安感を隠さない。また別の現役兵は「内鮮融和」なる題目に関して、京城師範

学校付属小学校の学芸会を見学した所感として、

僅か二年の勉学で日本語にあれ程の上達さがあるならばみんなの朝鮮の童が児校に通ふ事が出来たならば内鮮融和なるものもいと易いことだ〔中略、しかし〕劇的教育の可否、朝鮮児童が真に乃木將軍なりその感じに触れる事が出来るかどうか。更らに又つめこみ主義の忠君愛國の適否に至っては国民教育特に鮮童教育と言ふ事には我々将来に於て深重なる考慮が要する事だらう(一月九日、南摩茂)

と、「内鮮融和」実現に否定的ともとれる認識を示している。先に「京城師範学校々友会」で藤田一義現役兵が関東大震災時の朝鮮人「逆殺」に関する演説をしたことを紹介したが、この時その場の「同胞の朝鮮人が感激し」、「半島の色を青くさせるのは、諸君の力に待たなくては外に何物もない」と発言したという。吉野は「彼が朝鮮人であらうとは、私は思はなかつた。彼は朝鮮人とは思はれぬ位、国語が旨かつた」と述べている。本来「内鮮融和」を説くべき一年現役兵であるが、わざわざ「同胞の」と冠をつけたり、「朝鮮人とは思はれぬ」と述べている点は逆に、朝鮮人とは所詮「他者」以上の存在ではなく、「融和」など困難という意識の存在を示唆しているのではなからうか。

一方軍の側も、一年現役兵たちが退官するとき教官の大尉が贈った最後の言葉が、

軍備は他を侵略せんとする戦前の独逸の如くではいけません。軍備は他から侵害されんとする時に克ち得る丈けで良いのであります。併し国を守らんとする時には受動的に侵される迄黙して居つてはいけません。機先を制して攻勢に転ずることは極めて重要であります。これは即ち国防の一段であるが、世間は暗くして往々これを侵略主義と言ひます。吾々は常に泥棒を捕へて縄を編ふ様なことではいけません。諸君がこれが初等教育にたづさはつたならば、子供等に良くその理を諒解せしめて、立派な第二の国を築き得る様教

育して貰はねばなりません(三月三〇日、佐藤道義が筆記)

という程度ものだったことに象徴されるように、児童に軍隊・国防の意義を教えることは期待しても、「植民地支配の尖兵」としての役割まではさほど期待していなかったように思われる。こうした教育のあり方が三・一運動終息後すでに数年を経過した一九二五年という時期に由来するものか否かは今後の分析に譲らざるを得ないが、その背景には教官たる将校が必ずしも朝鮮でのみ勤務するわけではなく、内地で行うのと同じ教育方針しか採らなかつた(知らなかつた)こともあるだろう。確かに植民地支配の「担い手」意識までは明確に観察されな¹⁵⁾いせよ、それは彼ら一年現役兵が「国民教育ト軍隊教育トノ連携」という自らの使命に対する自覚までを欠いていたということを決して意味しない。もしそうであれば、彼らがわざわざ退官後『凝視の一年』を公刊したことの説明がつかないからである。次章では一年現役兵たちが同書を公刊した意図について詳しく分析する。

⑤軍隊経験の意義深さ

一年現役兵たちは単に折々兵営生活を懐古するためだけに『凝視の一年』を公刊したのではない。それは一年間の軍隊生活で得た「意義深い」体験を、「国民教育ト軍隊教育トノ連携」者という自己規定に基づき一般社会に伝達したいという積極的な意図に基づいていた。では軍隊体験のいかなる点が意義深い体験と認識されていたのか。それは、軍隊は一個の「修養場」であり、人生訓練の場という点であった。この点、一年現役兵代表者の吉尾勲は二六年三月付け『凝視の一年』『緒言』中、以下のように語っている。

私も勿論入隊前は人なみに軍隊をこわがってゐた青年の一人であつた。そして多くの学生が考へてゐる様に軍隊に入るともう中学校

や師範学校で学んだ、色々な知識が常識にうとい、将校や下士のためにすっかり根底からぶち壊されてしまひ、幾らもがいたつて狂つたつて、頭はかたくなつてしまひ人間一生の運も定まるのであらう。人間味のない唯冷かな石の様な生活を余儀なくされ、頭は融通の利かない石あたまになつて、しまふのだらうとのみ思ひこんでいた。

〔中略〕しかし時日を経るにつれて貴い毎日の体験により、その都度あたへられた懇切なる指導訓戒によつてそれがほんとうの徹した、視つめた内心のさゝやきではなく単に青年の血氣から来る情の産物であることを覺つて自ら悔ゆるようになった。

吉尾はその他の軍隊経験の利点として、体力の増進、薄情であつた者が多情多感な人間に変わり、利己的であつた者も「協同一致の誠心に燃えて来」たこと、貧弱であつた国防、軍隊、一般社会、人情などに関する知識が漸次深められ豊富になつてきたことを挙げ、軍隊生活を「処世上の須要欠くべからざる階段」、「宣なり軍隊即国民学校と称せらるゝは」と総括、称揚しているのである。

ちょうどこの時期、陸軍歩兵大佐赤松寛美は『軍隊生活の解剖』（偕行社、一九二五年）の中で、「軍隊は実に良兵良民の教育を以て、其最高の目標として居るのだ」、「兎に角我國民をして世界の競走場裡に立たしめんと欲せば、規律節制ありて協同動作を樂み、剛健なる体力と意志とを有する者たらしめざるべからず。瑞士國民が徴兵制度存置の必要を認め、「独仏戦争後の」独逸國民が過重なる軍備存続を認めたるは、軍隊教育の眞価を認めたからだ」などと述べている。同書は第一次大戦終結後の平和・反戦思想への反論、一般國民の啓蒙目的で書かれたものであるが、軍隊・兵役の存在意義が「規律節制ありて協同動作を樂み、剛健なる体力と意志を有する」國民育成に求められている点に注目したい。

確かに「良兵良民主義」とは日露戦後以来陸軍が唱道し続けて来たところ、それ自体は特に目新しい概念ではない。ただここで強調してお

きたいのは、現場で軍隊教育を担っていた陸軍将校から「軍隊が今日迄良兵良民主義を標榜して来たことや、国民学校を自称して来たことは、軍隊が一般的國民教育機関でもあるかの如き誤解を生ぜしむるに至つたのである。〔中略〕軍隊は決して一般的國民教育の機関でなく、戦争に必要なことを教育する専門教育機関なのである」といった、考えてみればごく当たり前の批判が出るほどに、第一次大戦後の陸軍は自らの存在意義を戦争の専門家育成よりも「規律節制」ある國民養成に求める度合いを強め、それを兵士や一般國民にも直接語っていたことである。軍隊体験を経た一年現役兵たちにとって、そうした軍の論理は、ある実感をもって受け入れられるに足る内容を持っていたのである。

ところが一年現役兵たちにとって、「国民学校」と称するに足る軍隊生活の良さを一般社会にも紹介すべき市販の書籍といえは、「予備将校や原稿生活者などがものしたもので頗るつきの偏見や肩の凝る様な文句をならべたものとか、色眼鏡を通しての觀察」（前掲赤松大佐の著書もその一例であろう）ばかりで、一般社会に「軍隊とはかたくるしい融通のきかないところだ」という先入観を植え付けるだけのものだった。吉尾が「緒言」中、

この書は決してそんな自己拡張又は我田引水的なものでないことは作者が軍隊と全く自利的な立場から懸隔してをり即ち軍隊と地方との中立地帯にあるとも云へよう、一年現役兵が四十幾人で各人各様の筆法で毎日の兵營生活に於ける感想そのまゝを書きつゞつた、一種の随筆的なものであるから軍隊生活一年間の思想の流れ変化が立派にうなづかれること、信ずる、〔中略〕世人には軍隊が単に軍事知識の養成や軍事能力の増進を計る場所であるといふことのみが知られてゐて、一方軍人精神即大和魂の鍊磨を主とした青年修養の爲め唯一無二の道場であるといふことは多く知られてゐないやうである。ところが私達が体験して痛烈に感ぜしめられたところに依れば、こ

の軍人精神の錬磨といふことは少なくとも一年間は軍隊にゐて兵營の生活をせなければ決して成しとげられないことであると思ふ

などと述べていることから明らかのように、一年現役兵たちは、軍隊国防に対する十分な理解を欠く一般社会に向けて「処世上の須要欠くべからざる階段」という軍隊生活の意義深さを語れるのは、実際の軍隊体験者たる自分たちをおいていない、という強い自負心を持っていた。まさに『凝視の一年』はそうした意味での軍隊経験の尊さを一般社会に語り、その理解・支持を獲得するために発行されたのである。こうした彼らの実践は、小学校教員として「国民教育ト軍隊教育トノ連携」つまり兵役の尊さを児童たちに語ることを期待された、退營後の社会的立場を考えれば、重要な事実であろう。

⑥一般社会における「背広の軍人」

『凝視の一年』の一年現役兵四五名が軍曹に任官して退營後、「国民教育ト軍隊教育トノ連携」のためどのような教職人生を歩んだか、また『凝視の一年』が社会でどのように読まれたかを詳細に明らかにすることは、残念ながら現時点において彼らが全員死去しており、証言を得ることもできないため困難である。しかし彼らは師範学校出という「つぶしのきかない」身分であり、また代表者吉尾勲が序文末尾に「京城孝昌普通学校宿直室に於いて」と記すなど、その大多数は教職の道を歩んだと考えられる。太平洋戦争勃発時には三〇代半ばを迎えた世代の彼らは「国民教育ト軍隊教育トノ連携」者として、どのような経歴を歩んだのであるか。ここでは、ほぼ同時期に京城師範を卒業、軍隊教育を経験した者の回想録として、池中義幸『道 教職に生きた「半島の日本人」三八年の歩み』（光陽出版社、一九八九年）を掲げよう。池中は『凝視の一年』刊行の二年後、一九二八年に京城師範を卒業、普通学校在職中の一

九二九年、歩兵第七四連隊（朝鮮咸興）に短期現役兵として入営している。

七四連隊には少数の一年現役兵（同年兵は四人だけ）しか配属されなかったため単独の分隊も組まず、「内務班で起居を共にした上等兵と一等兵にはじめの頃随分いじめられ」、体罰もしばしば受けていたという。入營後二か月にして上等兵に昇進、ようやく短期現役兵だけの一室に入られたが「暇さえあれば勉強には無関係の雑談や寝台にねころんで除隊後のことなどを話し合った」という。『凝視の一年』に描かれた一年現役兵たちとはかなり異なる生活態度であり、それが教育期間の短縮のためなのか、あるいは一年現役兵たちが本音と建前を上手く使い分けていたということなのかは不明だが、訓練自体は同じように厳格であった。未来の国民教育の担い手として「一般兵が二年かかるのを五ヶ月で、しかも下士官にまで仕上げ（中略）軍隊のことは何でもひととおり知ってお」くまで教育されねばならなかったからである。退營して教職現場に復帰すると、青年訓練所指導員を務めた。この間、同じ短期現役兵出身の同級生にも教師をやめ、満州国軍の中尉や大尉になっていった者があったという。

池中は一九三九年には小学校校長に昇進し、四〇年には同じ兵役経験のある部下の教師が朝鮮北部の「反日の巢」、「思想地帯として道内に知られている明川郡内」へ転出させられた。「国内の戦時体制を強化するために青年訓練所を増設、それを各小学校に併置して、兵役経験のある教師に教練指導員を兼務させ」るためであった。池中自身四一年同じ明川郡内の国民学校に転勤、新設の青年訓練所主事を兼務して指導にあたり、四二年一月、朝鮮への徴兵制導入に備え「日本語の分からない不就学の青年に簡単な会話のできる最低国民学校二年生くらいの日本語を教え込む」べく公立青年特別錬成所が同地に設立されると、その所長をも兼務させられている。

池中の筆は家族や同僚など周辺の人々の状況を淡々と描くことに多くが費やされ、上記の訓練の実相や当時の所感にはほとんどふれていない。戦時期教職に在った教師の回想の特徴の一つが、「自分抜き」つまり児童の皇民化過程に対する、自己の主體的関与という視点の欠落であることは、長浜功氏の指摘するところである。¹⁸⁾ 池中の歩みは地域社会における「皇民化政策」の展開過程とまさに軌を一にしたものだが、果たして彼らは軍隊の存在意義に対する一定の理解と知識、「軍隊教育ト国民教育ノ連携」者という自己意識を全く欠いたまま、そうした多様な軍事教育関連の職務を果たし続けることが果たして可能だったのだろうか。池中や荻野、そして『凝視の一年』の一年現役兵たちは退営後、戦時期の教育現場で軍隊・兵役の価値や必然性を、軍隊教育の中で身につけた論理をもって語ることも多かつたのではないか。とすれば『凝視の一年』中、ある一年現役兵が退営間際、

果して永遠にこの平和が保たれると思ふか、よしや十年間続いたとしてもそれから以後の事は恐らく神様でも御存じあるまい十年後になりて初めて覚る事ではもう時期が遅い、許さぬ。も少し広い目で国家といふ事を自覚せねばならない。戦争の発生を永遠に絶滅させる事は一つの夢想に過ぎないだらう、かくの如き時機にまで世界の理想が達して居らぬ事を自覚されたい。多くの人間の曲解しつゝある軍隊なるものも、もつとく慎重に大きな目で凝視されたい、今や吾々も此の機に於て軍隊を出で教育界に身を投ぜんとして居る。如何に吾々の責任や重大であるか？（三月二二日、熊谷鉄之）

と述べ、「中年は須臾にして来るであらう」の決意を披瀝していることは、彼らが実際に「中年」を迎えた時の社会的立場を考えればきわめて印象的・示唆的である。この点、かつて『凝視の一年』中「昔の武士、それは今の軍人である。自分等がそれである。吾々は此れを思うと一層自重しなくてはならない〔中略〕私の故郷それは朝鮮である。家庭は歩

兵第七十九連隊だ」（五月五日）、「腐敗せる現代思想、此れをどうして善導したらいいだろうか。それを美化する作業は私等の責務である。吾人先づ愛に燃えつゝ純な児童を教育し、そして、光輝ある社会を造らねばならない」（二月一日）などと述べていた井下田繁雄は、後の一九四〇年三月、朝鮮教育会機関誌『文教の朝鮮』に黄海道沙里院公立高等女学校教諭の肩書きで「輔翼の本質」と題する文章を発表、「戦時、平時を問はず、自己の職責を果す事が忠義である。（中略）愛国の至誠、輔翼の本質は、戦場に於ても、銃後に於ても、将又戦時、平時を問わず、異なる所は無い」と戦時下臣民の責務を強調している。『凝視の一年』の一年現役兵たちがうけた軍隊教育は、少なくとも彼らをして社会に向かい戦争、国家の尊さを語る姿勢を持たせ続ける一要因として機能したと想像することは、決して無理なことではあるまい。

おわりに

本稿では第一次大戦後、まさに反戦反軍思想が最も昂揚した時期の兵営内で、一年現役兵という「国民教育ト軍隊教育トノ連携」者たることを期待された兵士たちが、軍隊の存在意義についていかなる説明を受け、どのように理解していったのかを分析した。その結果、彼らは単に「忠君愛国」といった抽象的な題目だけでなく、国際連盟の無力、アメリカの脅威という具体的な国際情勢との関連から軍隊の存在意義を教えられ、かつ日常生活においてもそれを兵営外部、一般社会に対して語っていたことが確認できた。

また一年現役兵たちは軍隊生活を「国民学校」と称するに足る、以後の人生にとって意義深い体験として認識していた。彼らの語りの内容は、当該期の軍が自己の存在意義をどこに求め、国民に正当化しようとしていたかを示唆している。強制された「日記」は、教育の内容を日々咀嚼

し、自らの言葉として発話させるための装置に他ならなかった。もちろん、そのような軍の論理が一年現役兵たちにおいて完全に内面化されていたと即断するつもりはない。しかし『擬視の一年』刊行自体、彼らが教えられた軍の論理を主体的に一般社会に向けて伝達しようとする行動であった。そうした彼らの思考の枠組みと実践は、通常反軍平和思想の高揚というイメージをもって語られることの多い大正期と、後年の戦時動員体制期との「連続性」という問題を考えるとき、きわめて示唆的な事実であると考える。

註

- (1) 近沢出版部発行、定価三円五〇銭。
- (2) 軍隊教育令(一九一九年一月二六日改定) 第四編の文言。
- (3) 戸塚『いたずらの発見』(双柿舎、一九七八年) 六一・六三頁。
- (4) 逸見『師範学校制度史研究 15年戦争下の教師教育』(北海道大学出版会、一九九一年) 二三・三五・三六頁。なお戸塚、逸見氏ともこの服役を「短期現役兵」としているが、二六年時点での呼称は「一年現役兵」である。
- (5) 歩兵第一八連隊第五中隊 大正一四年兵五友会編『思い出の手記 喇叭の響き誰が知る』。同書は一九二九年同連隊(名古屋)に入営した兵士一七名が約五〇年後の一九七七年、軍隊生活の思い出を綴った書である。
- (6) 中等学校以上の各学校における軍事教練実施に伴い、一九二七年の徴兵令改正(兵役法)によって一年現役兵は短期現役兵に制度が改められた。両制度の概要、改正の経緯に関しては遠藤芳信『近代日本軍隊教育史研究』(青木書店、一九九四年) 四一七―四五三頁、加藤陽子『徴兵制と近代日本』(吉川弘文館、一九九六年) 一六八・一九六頁を参照。両制度とも、現役終了後は直ちに第一國民兵役に編入され、戦時に召集されることはほほあり得ないとされてきたため、「合法的徴兵忌避」との批判が常に存在した。この点は菊池邦作『徴兵忌避の研究』(立風書房、一九七七年)、藤野幸平『謎の兵隊 天皇制下の教師と兵役』(総和社、一九九四年)などに詳しい。
- (7) 前掲藤野『謎の兵隊 天皇制下の教師と兵役』一〇一―一〇二頁。
- (8) ただし兵士に対する日記の強制は、一九一一年、軍隊教育実験会なる団体が発行した『新兵教育ノ実験』(兵事雑誌社)なる著作中、「二年現役婦休制ノ今日ニ於テハ第一年度ノ教育特ニ新兵期間ノ教育完全ナルニ非ズンバ成功得テ期シ難

- いので、「新兵ニハ手簿ヲ備ヘシ」めて「日々修得セル學術科ノ大要及所感等ヲ筆記セシメ後日ノ参考ニ資セシムルヲ要ス是レ其ノ記憶ヲ確實ナランシメ且兼ネテ習字ヲ行ハシ」めるのがよい、と主張しているように、日露戦後実施されるようになった兵卒監視の手段である。この点、拙稿「兵營の「秩序」と軍隊教育」(九州史学) 一一八・一一九、一九九七年) 参照。
- (9) 浅野和生『大正デモクラシーと陸軍』(慶応通信、一九九四年)、遠藤芳信『近代日本軍隊教育史研究』(青木書店、一九九四年) 第一部第六章「一九二一年軍隊内務書改正をめぐる思想対策」、黒沢文貴『大戦間期の日本陸軍』(みすず書房、二〇〇〇年) 特に第三章「日本陸軍の「大正デモクラシー」認識」、吉田裕「日本帝國主義のシベリア干渉戦争―前線と国内状況への関連で―」(『歴史学研究』四九〇、一九八一年三月) など。いずれも軍上層部における「デモクラシー」分析・理解とそれへの対応策(例えば一九二一年軍隊内務書改正など)に議論が集中しており、軍が反軍平和思想の昂揚下、自己の存在を個々の国民、兵士たちにとどのような論理で説明していたのか、という問題にはさほど関心を払っていないように思われる。
- (10) 藤原彰『天皇制と軍隊』(新装版、青木書店、一九九八年) 六頁、同『日本軍事史 上巻』(日本評論社、一九八七年) 一五八頁。
- (11) 『借行社記事』五七四、一九三二年六月、所収。
- (12) 戸塚前掲書六〇・六一頁。ちなみに戸塚は「国務遂行」の例として、教官は米騒動時の軍隊出動を考えていたのではないかと付度している。
- (13) 寒川「新潟の生活教育運動」(『昭和和教育史への証言』三省堂、一九七一年、一七六―一七八頁)。彼は「おかげで(退官時) 伍長をすべりました」というが、軍にしてみればこうした対応によってともかくも無事に服役させ終えたとも言え、その意味ではうまく丸め込まれたと言えなくもない。
- (14) 一九二四年一月二日、全国の大学・高校・高専の社会科学研究会の連合体・学生社会科学連合会を中心に「全国学生軍事教練反対同盟」が結成された。翌二五年一〇月には小樽高商の軍事教練で朝鮮人暴動の想定が問題視され、それを契機に全国で軍事教育反対運動が再燃した。この点、夏堀正元「小樽の反逆 小樽高商軍事教練事件」(岩波書店、一九九三年) や『国史大辞典』「学生社会科学連合会」の項を参照。
- (15) 佐野通夫「植民地朝鮮における日本の教育政策」(『東京大学教育学部紀要』二一、一九八一年) は朝鮮における日本人教員への処遇を植民地支配期全体を対象に検証し、「朝鮮内における教員養成の内、日本人のそれは、日本国内の制度に準拠し、互に、通用するように作られていた」し、彼ら自身にも「朝鮮における」「教育」であるという意識はほとんど見ることができない(二三〇頁)と結論づけている。ただし同論文中、一年現役兵・短期現役兵教育に関する言及はみら

れない。

- (16) 陸軍歩兵中尉堀木祐三『近代思想と軍隊教育』（成武堂、一九三三年）一〇七頁。
- (17) 京城師範学校同窓会長小松実氏の二〇〇一年六月のご教示による。また、京城師範学校史『大愛至醇』（一九八七年）には数名の一九二四年卒業生が回想を寄せているが、戦後の同窓会活動に関する回想がほとんどで軍隊経験や戦中の教育“実践”に関する回想は見受けられない。
- (18) 例えば一九二六年三月埼玉県師範学校を卒業、短期現役兵として歩兵第五七連隊に入営した荻野末も、在営中着任予定校の校長に「青年訓練所の指導もしてもらう」旨言い渡されたと回想している（荻野「ある教師の昭和史」一ツ橋書房、一九七〇年、一一頁）が、そうした「背広の軍人」としての自己の実践、意識にはほとんど言及がない。同書に対する長浜氏の批判は、『日本ファシズム教師論』（明石書店、一九八四年）二二六・二二七頁。

（国立歴史民俗博物館歴史研究部）

（二〇〇三年二月三日受理、二〇〇三年五月九日審査終了）

Post-WWI Military Education During a Year of Active Duty

ICHINOSE, Toshiya

In April of 1924, forty-five graduates of the Keijo Normal School enlisted for one year of active service in the 79th infantry regiment in Yongsan, Korea. Following their discharge in 1925, they published a "military diary" entitled *Gyoshi no ichinen* (Watchful Year) which comprised edited selections of the daily journals they kept individually as part of their education. At a time when anti-war anti-military ideology was reaching its peak in post-WWI Japan, these soldiers were expected to act as "bridges between national and military education" in their future roles as primary school teachers. This study examines the published diary to understand the ways that the military's existence was explained to and understood by these teachers-to-be inside the barracks.

During their year of active duty, the soldiers were instructed on more than abstract themes of "loyalty to the sovereign" (*chukun*) and "love of nation" (*aikoku*). They were instructed on the value of the military's existence in connection with concrete international circumstances such as the League of Nation's impotency and American intimidation; additionally, they clearly addressed general society outside the barracks when they spoke on such matters in daily life. They regarded life in the military as an experience of great significance for their future lives, likening it to a "national school" (*kokumin gakko*). In the stories they tell, we begin to understand how the military defined the value of its own existence and sought to legitimate itself to the nation. The "diary" was but a mechanism designed to have the soldiers digest the substance of their education and express it in their own words.

There is no reason to conclude that these soldiers fully internalized the military's logic in the one year of active duty they served. Nonetheless, the publication of *Gyoshi no ichinen* represents an attempt to communicate with society at large as the agents of a logic taught them by the military. Their intellectual framework and practices are illuminating when considering the continuities between the Taisho period, whose image is one of strong anti-war and peace ideology, and the subsequent institutions of wartime mobilization.
